

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2022

課題番号：16K04226

研究課題名（和文）マインドフルネスに基づくソーシャルワーク専門職エンパワメント・プログラムの開発

研究課題名（英文）The study for the development of a mindfulness-based empowerment program for social workers

研究代表者

池埜 聡（IKENO, Satoshi）

関西学院大学・人間福祉学部・教授

研究者番号：10319816

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：マインドフルネスとソーシャルワーク（SW）の融合に関する理論的考察とSW専門職対象のマインドフルネス・プログラムの構築を果たし、SW専門職のエンパワメントに資するプログラムの普及活動を展開した。本研究は、SWにおけるマインドフルネスの導入可能性とその意義について、理論及び実践の両面から検討した最初の研究プロジェクトとなる。マインドフルネスがもたらすSW専門職のメンタルヘルスの向上、援助関係の深化、バーンアウトや二次受傷の緩和のみならず、社会的弱者の心理社会的問題に対する新たなマインドフルネスの方法「エンゲージド・マインドフルネス（Engaged Mindfulness）」の検討も行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ソーシャルワーク（SW）専門職のストレス緩和とバーンアウトのリスク低減が課題となっている中、本研究はマインドフルネスにもとづくSW専門職のエンパワメントに資する方法を提示した。SW専門職への支援は、これまで教育的な研修やスーパービジョンの充実など思考や認知に訴えるものが中心であった。一方、本研究は身体感覚レベルでの気づきを伴う新たな自己覚知の重要性を示唆し、SW専門職の援助を見通す力を高め、思いやりのある援助的プレゼンスを深める道筋を明らかにした。本研究は、社会的弱者に寄り添うための身体から認知レベルに至る気づきに満ちたSW専門職の創出と持続的な就業を支えるものとして、社会的意義が見出される。

研究成果の概要（英文）：This study achieved the theoretical consideration for the integration of mindfulness into social work practice. The consideration finally led to the construction of a mindfulness program that should prevent burnout and moral injury as well as deepen the trustful therapeutic relationship for social workers.

This is the first research project to examine the possibility of introducing mindfulness into social work practice from both theoretical and practical perspectives. This research also scrutinized and disseminated the "Engaged Mindfulness", a new mindfulness methodology for the psychosocial issues among vulnerable and socially-isolated populations.

研究分野：社会福祉学

キーワード：ソーシャルワーク マインドフルネス 援助関係 バーンアウト 社会正義 エンパワメント ソーシャルワーカー

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初、社会福祉実践現場では、ソーシャルワーク (SW) 専門職の配置と認定制度の確立が進む一方、低賃金、低い社会的評価、業務負担の増大、そして仕事と家庭の両立の困難さなど SW 専門職を取り巻く環境は厳しいものがあつた。他職種に比べて離職率も高く、ストレス緩和とバーンアウトのリスクの改善が課題となつていた。

従来、SW 専門職への支援は、教育的な研修やスーパービジョンの充実など思考や認知に訴えるものが主であつた。一方、2015 年前後から日本で紹介され始めたマインドフルネスは、身体感覚を含むメタ認知レベルでの自己への気づきを深め、思考や認知によるとらわれを手放すことで生じる脱中心化によってストレス低減を促進する。研究開始時点において、欧米ではすでにマインドフルネスによる慢性的ストレスの低減、うつ再発予防、依存症治療、疼痛コントロール、免疫力向上、さらに共感力やコンパッション(他者の苦しみを取り除きたいという思い)といった肯定的感情の涵養などが脳神経科学の知見を含む数十に及ぶメタアナリシスによって実証されていた。

このような状況の中、SW 専門職の直面する多層なレベルでのストレスや葛藤の緩和と安心感ある援助関係の構築のためにマインドフルネスの有効性を示し、SW 専門職のエンパワメントを可能にする新たな支援方法を模索する意義は高いと判断された。

2. 研究の目的

本研究における第 1 の目的は、マインドフルネスにもとづく社会福祉士や精神保健福祉士など SW 専門職のストレス低減と援助関係の涵養に資するエンパワメント・プログラムの作成とその普及にあつた。マインドフルネスとは、「今、この瞬間に意図的に注意を向けることによって現れる気づき」と定義され、欧米を中心にメディテーションやボディワークなどから成るセルフ・ケアを目的とした複数の実践方法を表す。多領域においてストレス低減や共感力の向上などの効果が実証されているマインドフルネスを SW 専門職の就業特性に合う方法に発展させ、SW 専門職への支援プログラム構築を目指した。

第 2 の目的は、本研究の推進途上で新たに創出された。それは、社会的弱者の心理社会的問題に対するマインドフルネス方法論「エンゲージド・マインドフルネス (Engaged Mindfulness)」の検討と普及として示される。2018 年度に米国カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (UCLA) 医学部マインドフル・アウェアネス・リサーチ・センター (MARC) に 1 年間在籍し、心理化及び個人化されたマインドフルネスの社会的なブームによって、ストレスや生きづらさに対する個人への自己責任論が増長され、社会的文脈の影響が矮小化されることへの批判に直面した。そのため、研究開始当初に予測していたストレス低減やバーンアウト抑制を超えた、価値と技術の両側面から SW 専門職をエンパワメントしていくマインドフルネスを見通すことを新たな研究目的に据えた。

3. 研究の方法

第 1 の目的を達成するための方法は、以下に示される。

- (1) SW 専門職を取り巻く問題や課題へのマインドフルネスの効果機序及び実証研究の包括的文献レビューの実施
- (2) 日本マインドフルネス学会及びオックスフォード大学マインドフルネス・リサーチ・センター (OMC) 共催によるマインドフルネス認知療法 (MBCT) 指導者養成プログラム (Module 1 から最終 4 まで) の受講
- (3) 理論研究及び実践トレーニングにもとづく SW 専門職対象のマインドフルネス・プログラム (Mindfulness-Based Social Workers Empowerment Program: MB-SWEP) の構築
- (4) MB-SWEP の SW 専門職への提供と効果測定
- (5) MB-SWEP による SW 専門職の援助関係の変容にかかわる質的研究の実施
- (6) MB-SWEP の修正と普及活動の展開

第 2 の目的を達成するための方法は、以下に集約される。

- (1) 2015 年頃から顕在化してきたマインドフルネスの有害事象と批判に関する包括的文献レビューの実施
- (2) トラウマ・サバイバーに対するマインドフルネスの有用性とリスクに関する文献レビューと実践トレーニングの受講
- (3) エンゲージド・マインドフルネスの方法論に関する文献レビューと実践トレーニングの受講
- (4) 社会正義の価値に根ざし、社会的弱者の包摂を果たすマインドフルネスのあり方と指導方法を提供する MARC 主催 1 年間マインドフルネス指導者養成プログラム、「マインドフルネス・ファシリテーション・トレーニング (Training in Mindfulness Facilitation: TMF)」の受講
- (5) エンゲージド・マインドフルネスの中心的な方法である関係性マインドフルネス (relational mindfulness) の情報収集と実践方法の習得

4. 研究成果

本研究の補助事業期間（平成 28 年度～令和 4 年度）各年度に従って、以下研究成果の概要を記載する。

(1)平成 28 年度

当時のアップデートされたマインドフルネスの効果機序と援助関係への影響に関連する文献レビューを行い、論文 2 本^{1) 2)}と社会福祉専門職向けの月刊誌³⁾での連載で発表した。また、同年 9 月よりメリーランド大学終身フェローである大谷彰氏とともに研究会「マインドフルネス研究会@梅田」を立ち上げ、月 1 回のペースで会議を重ねてきた。臨床心理、精神医学、統合医療、脳科学等の研究者・実践者計 12 名に参加いただき、活発な情報交換が継続された。本研究会は、現在もマインドフルネスにかかわる情報交流の場となっており、参加者それぞれの実践及び研究推進の基点の一つになっている。

包括的文献レビューと研究会での情報交流にもとづいて MB-SWEP 試行版を作成し、同年 6 月～7 月に SW 専門職対象の MB-SWEP の講座を立ち上げた。計 25 名の SW 専門職に対する MB-SWEP 実施後、準実験デザインに基づき、マインドフルネス状態、ストレス度、援助関係等について量的・質的混成法から探索した。この一次分析結果は、第 3 回日本マインドフルネス学会（平成 28 年 11 月）にて報告された⁴⁾。

(2)平成 29 年度

平成 28 年度に実施した MB-SWEP の効果に関する成果報告として、論文の執筆と投稿⁵⁾及び学会発表 3 回^{6) 7) 8)}を行った。準実験デザインではあるものの、マインドフルネス状態を測定する Five Facet Mindfulness Questionnaire (FFMQ) 日本語版の総合点及び Observing と Non-react では実践前後で有意差 ($p < .05$) が見られ、実施後のインタビュー調査では、身体感覚を用いた脱中心化や危機的状況に対する意図的な心理的スペースの確保が可能になり、ストレス緩和と新たな援助観の創出にマインドフルネスが寄与する可能性が示された。

また、上記 SW 専門職対象のマインドフル実践評価を通じて、SW 専門職対象のマインドフルネス実践方法をまとめた書籍（単著）⁹⁾と、マインドフルネスの視点を盛り込み、SW 援助関係を事例検討から読み解いた書籍（共著）¹⁰⁾の 2 冊を刊行した。

マインドフルネス指導方法については、マインドフルネスストレス低減法 (MBSR)（公式認定プログラム：8 週間：平成 29 年 10 月から 12 月）およびマインドフルネス認知療法 (MBCT)（日本マインドフルネス学会主催：Module 2：平成 29 年 7 月）を修了し、SW 専門職に対するマインドフルネス・プログラムの実践応用に活用した。

(3)平成 30 年度

平成 30 年度は、Visiting Project Scientist in Psychiatry として UCLA MARC に赴任し、米国におけるマインドフルネス実践の現状と課題の抽出、さらに MARC との研究・実践における連携体制を構築した。MARC では、有害事象の問題とブーム化したマインドフルネスへの批判の論点整理を行い、マインドフルネスの原点である上座部仏教の瞑想法に関する歴史の変遷過程の把握、さらにはマインドフルネスに包含される世俗化の問題について資料分析を行った。

同時に、前述した MARC 主催 1 年間マインドフルネス指導者養成プログラム (TMF) を修了し、これまで見落とされていた社会的弱者の包摂を視野にいれた関係性マインドフルネスにもとづくマインドフルネス実践のあり方と指導方法を習得した。また、平成 29 年度から引き続いて MBCT の Module 3, 4 を受講し、MBCT 指導者養成のためのすべての Module を修了した。これら多様なマインドフルネスの実践と指導者養成の課題は、学会発表（臨床実践奨励賞）¹¹⁾及び論文¹²⁾として報告された。

UCLA MARC での赴任期間中、米国を中心に個人化あるいは世俗化された経緯を歴史的に探求し、マインドフルネスが本来包含していた慈しみの心性、社会的弱者の包摂、そして深い内省とトラウマからの回復などの機能を把握した。また、マインドフルネス実践方法として、社会的弱者としての生きづらさに伴うトラウマへのアプローチと危険性について重層的なトレーニングを受講した。SW 専門職が日々接する被虐待や劣悪な環境で生活を余儀なくされている人々への支援にマインドフルネスを応用することで、別の角度から SW 専門職のエンパワメントに資するマインドフルネスのあり方を検討するための新たな研究の方向性を見出すことができた。

(4)令和元年度

令和元年は、第 2 の研究目的に沿った SW の価値の体現に資するマインドフルネスのあり方に焦点を当てた論文^{13) 14)}、大学研究センター主催セミナー¹⁵⁾、そして学会発表¹⁶⁾などの成果のとりまとめに従事した。論文^{13) 14)}は欧米において近年高まっている個人化・心理化されたマインドフルネスへの批判を整理し、SW の価値基盤である社会正義 (social justice) の実現につながる新たなマインドフルネスの理論及び実践方法を提示した。それは「エンゲージド・マインドフルネス」あるいは「第 2 世代マインドフルネス」と表され、SW 実践への応用を可能にするマ

インドフルネスの姿を浮き彫りにすることができた。

上記2つの研究目的から培われたSW専門職を重層的にエンパワーしていくマインドフルネスの普及と実践応用の可能性を確かめるため、マインドフルネスをSW実践に取り入れている医療ソーシャルワーカーのグループと協働し、「九州マインドフル医療ソーシャルワーク研究会(KM-MSW研究会)」を構築した。令和元年は月1回4時間、計4回の研究会を実施。研究会では、多様なマインドフルネス・プログラムを展開しながら、約20名のソーシャルワーカーを含む医療専門職とがんサバイバーや精神疾患経験をもつ当事者が互いにマインドフルネスによる多次元の効果を議論する場へと発展した。

(5)令和2年度～4年度

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)蔓延に伴って、KM-MSW研究会及び普及活動の中断と勤務校における業務負担の増大により、研究期間の延長を余儀なくされた。令和2～4年度は、令和元年から始めたKM-MSW研究会での成果の論文化¹⁷⁾¹⁸⁾、マインドフルネスとソーシャルアクションの連動を考慮したマインドフルネス・アプローチ考案の必要性に関する総説の出版¹⁹⁾、この方法論において軸となる関係性マインドフルネスについての学会主催研修の実施²⁰⁾、マインドフルネスのトラウマ・ケアにおける有害事象に関する学会発表²¹⁾、そして青少年教育のためのマインドフルネス・リトリート・プログラムの学会発表(最優秀ポスター発表賞)²²⁾と論文化²³⁾を実現した。

普及活動として、兵庫県社会福祉士会との連携のもとに6週間のMB-SWEPを毎年実施。3年間で100名ほどの参加者があった。さらにMB-SWEPの発展版としての4週間プログラムを構築し、併せて毎年実施した。その他、障害者福祉施設、高齢者福祉施設、社会福祉協議会、介護支援専門員協会、精神保健福祉センター、少年鑑別所、少年院などのSW専門職や対人援助職、学会主催研修会に参加した研究者、NPO法人、地方自治体、医療機関などが主催する講座に参加した般市民に向けて、本研究で培われたマインドフルネスの基礎知識、理論的枠組み、実践方法、そして多様な応用可能性について普及活動を展開した²⁴⁾。

注釈：

1. 池埜聡(2016)「少年院矯正教育へのマインドフルネス導入をめぐる実践及び研究課題」『人間福祉学研究』9(1), 67-90。(査読有)
2. 池埜聡(2016)「支援者のマインドフルネス経験が援助関係に与える影響と機序」『精神科治療学』32(5), 651-654.
3. 池埜聡(2015-2016)「マインドフルネス入門：ストレスを緩和し、仕事の充実感を高めるために」『ケアマネジャー(連載全12回)』17(8-12), 18(1-7).
4. 池埜聡(2016)「マインドフルネスを通じた社会福祉専門職の主観的変容：準実験デザインに基づく量的・質的分析からの探索的研究」『日本マインドフルネス学会第3回大会』ポスター発表, 早稲田大学.
5. 池埜聡(2017)「マインドフルネスがもたらすソーシャルワーク援助関係への影響：社会福祉従事者の主観的変容を踏まえた探索的研究」『人間福祉学研究』10(1), 91-116。(査読有)
6. 池埜聡(2017)「マインドフルネスがもたらすソーシャルワーク援助関係への影響：ソーシャルワーカーの主観的変容を踏まえた探索的研究」『日本ソーシャルワーク学会第34回大会』口頭発表, 北星学園大学.
7. 池埜聡(2017)「マインドフルネスによるソーシャルワーカーの価値体系における主観的変容：8週間マインドフルネス・プログラム受講後の質的探索的調査から」『日本社会福祉学会第65回秋季大会』口頭発表, 首都大学東京.
8. 池埜聡(2017)「教育現場におけるマインドフルネス：女子少年院での実践を通じた援助構造構築に向けた課題」『日本マインドフルネス学会第4回大会』口頭発表(招待・特別), 早稲田大学.
9. 池埜聡(2017)『福祉職・介護職のためのマインドフルネス』中央法規出版.
10. 足立里江・池埜聡(2017)『ケアマネジメントにおける「援助関係の軌跡」：クライアントとの間にあるもの』関西学院大学出版会.
11. 池埜聡(2018)「マインドフルネスの多様性に呼応する指導者養成の課題：UCLA Training in Mindfulness Facilitation (TMF) の経験を踏まえて」『日本マインドフルネス学会第4回大会』ポスター発表, 早稲田大学.
12. 池埜聡(2019)「マインドフルネスの多様性に呼応する指導者養成の課題：UCLA Training in Mindfulness Facilitation (TMF) の経験を踏まえて」『Human Welfare』11(1), 55-69.
13. 池埜聡(2019)「ソーシャルワークの価値の体現に資するマインドフルネス：“Bare Attention”からの脱却と社会正義の発露に向けて」『人間福祉学研究』12(1), 103-127。(査読有)

14. 池埜聡 (2020) 「『第2世代マインドフルネス』の出現と今後の展望：社会正義の価値に資する『関係性』への視座を踏まえて」 *Human Welfare*, 12(1), 87-102.
15. 池埜聡 (2019) 「臨床ソーシャルワーク研究者がアメリカで見たマインドフルネスの光と影」 『同志社大学ウェルビーイング研究センター主催セミナー』口頭発表 (招待), 同志社大学.
16. 池埜聡 (2019) 「日本的マインドフルネスの"デイ・ライト (仄光)" : アメリカン・マインドフルネスの光と影を踏まえて」 『日本マインドフルネス学会第6回大会』学会企画シンポジウム・パネル (指定), 関西大学.
17. 井上祥明・玉野緋呂子・神矢恵美・楯本愛季子・池埜聡 (2021) 「医療ソーシャルワークによるがん患者のエンパワメントに資する両立支援の展開：マインドフルネスを含むホリスティック・アプローチを試みた事例研究」 *Human welfare*, 13(1), 119-138.
18. 井上祥明・玉野緋呂子・池埜聡 (2022) 「終末期、緩和ケアにおける医療ソーシャルワークの新展開：マインドフルネスによる『死』への寄り添いを果たした事例研究」 *Human Welfare*, 14(1), 139-155.
19. 池埜聡 (2022) 「位相的観点から見通すマインドフルネスの新展開：社会正義の価値に資する方法として」 『心理学評論』64(4), 579-598. (査読有)
20. 池埜聡・内田範子 (2021) 「リレーショナル・マインドフルネスの実践」 『日本マインドフルネス学会2020年度研修会』オンライン開催.
21. 池埜聡 (2020) 「マインドフルネスにおけるトラウマ治療：その展開と最前線」 自主企画シンポジウム「トラウマケアにおけるマインドフルネスの位相」 『第19回日本トラウマティックストレス学会全国大会』口頭発表, オンライン開催.
22. 池埜聡 (2021) 「マインドフルネスにもとづく青少年教育の実践的示唆：NPO 法人 Inward Bound Mindfulness Education (iBme) の挑戦」 『日本マインドフルネス学会第8回大会』ポスター発表, オンライン開催.
23. 内田範子・池埜聡 (2022) 「マインドフルネス・リトリートによる青少年のための教育実践："Inward Bound Mindfulness Education (iBme)" によるコンパッションに根ざした多様性包摂の試み」 *Human Welfare*, 14(1), 157-173.
24. 主な連携機関は以下の通りである (順不同)：兵庫県社会福祉士会、神戸市精神保健福祉センター、京都市児童福祉センター、NPO 法人マックネットシステム、神戸少年鑑別所、神戸調停協会、兵庫県司法書士会、神戸市社会福祉協議会、吹田市社会福祉協議会、宝塚市立中山手台小学校、大阪市こころの健康センター、健康保険組合連合会大阪連合会、宝塚市保険福祉サービス公社、社会福祉法人協同の苑、公益財団法人関西生産性本部、大分県がん診療連携協議会、国立病院ソーシャルワーカー協議会九州支部、大分県日田市介護支援専門員協会、鹿児島県社協老人福祉施設協議会、兵庫県豊能町教育委員会、富山県女性財団、宝塚市、丹波市、日本学生相談学会、日本マインドフルネス学会、日本保健医療社会福祉学会、日本音楽療法学会、関西心理学会など.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計16件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 11件）

1. 著者名 池埜聡	4. 巻 38(1)
2. 論文標題 少年院におけるマインドフルネス	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 精神科治療学	6. 最初と最後の頁 93-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池埜聡	4. 巻 64(4)
2. 論文標題 位相的観点から見通すマインドフルネスの新展開：社会正義の価値に資する方法として	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 心理学評論	6. 最初と最後の頁 579-598
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24602/sjpr.64.4_579	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 内田範子・池埜聡	4. 巻 14(1)
2. 論文標題 マインドフルネス・リトリートによる青少年のための教育実践：Inward Bound Mindfulness Education (iBme) によるコンパッションに根ざした多様性包摂の試み	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Human Welfare	6. 最初と最後の頁 157-173
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 井上祥明・玉野緋呂子・池埜聡	4. 巻 14(1)
2. 論文標題 終末期、緩和ケアにおける医療ソーシャルワークの新展開：マインドフルネスによる『死』への寄り添いを果たした事例研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Human Welfare	6. 最初と最後の頁 139-155
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 池埜 聡	4. 巻 3(3)
2. 論文標題 コロナ禍におけるマインドフルネス：ストレス、差別、モラルインジュリーに向き合うために	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 関西学院大学心理科学実践	6. 最初と最後の頁 1-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 井上 祥明・玉野 緋呂子・神矢 恵美・鎌本 愛季子・池埜 聡	4. 巻 13 (1)
2. 論文標題 医療ソーシャルワークによるがん患者のエンパワメントに資する両立支援の展開：マインドフルネスを含むホリスティック・アプローチを試みた事例研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Human Welfare	6. 最初と最後の頁 119-138
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 池埜 聡	4. 巻 13 (1)
2. 論文標題 “トラウマ・インフォームド・ソーシャルワーク” 構築への序章：「共に在る」価値に根ざして	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人間福祉学研究	6. 最初と最後の頁 65-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 池埜 聡・森竹 ひろこ (インタビュアー)	4. 巻 36
2. 論文標題 マインドフルネスの光と影：個人と社会の課題を顕にし、アクションを求める新しい瞑想文化	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 サンガジャパン	6. 最初と最後の頁 138-159
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池埜聡・内田範子	4. 巻 12-1
2. 論文標題 「第2世代マインドフルネス」の出現と今後の展望：社会正義の価値に資する「関係性」への視座を踏まえて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Human Welfare	6. 最初と最後の頁 87-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 池埜聡	4. 巻 12-1
2. 論文標題 ソーシャルワークの価値の体現に資するマインドフルネス：“Bare Attention”からの脱却と社会正義の発露に向けて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 人間福祉学研究	6. 最初と最後の頁 103-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 池埜聡・内田範子	4. 巻 11
2. 論文標題 マインドフルネスの多様性に呼応する指導者養成の課題：UCLA Training in Mindfulness Facilitation (TMF) の経験を踏まえて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Human Welfare	6. 最初と最後の頁 55-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 池埜聡	4. 巻 13
2. 論文標題 スクールソーシャルワークの新たな射程：エビデンスに基づくトラウマ理解を実践に活かすために	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 学校ソーシャルワーク研究	6. 最初と最後の頁 113-118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池埜聡	4. 巻 66(9)
2. 論文標題 矯正教育におけるマインドフルネス：効果と課題	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 教育と医学	6. 最初と最後の頁 74-83
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池埜聡	4. 巻 10 (1)
2. 論文標題 マインドフルネスがもたらすソーシャルワーク援助関係への影響：社会福祉従事者の主観的変容を踏まえた探索的研究	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 人間福祉学研究	6. 最初と最後の頁 91-116
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 池埜聡	4. 巻 32 (5)
2. 論文標題 支援者のマインドフルネス経験が援助関係に与える影響と機序	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 精神科治療学	6. 最初と最後の頁 651-654
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池埜聡	4. 巻 9-1
2. 論文標題 少年院矯正教育へのマインドフルネス導入をめぐる実践及び研究課題	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 人間福祉学研究	6. 最初と最後の頁 67-90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計24件（うち招待講演 15件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 池埜聡
2. 発表標題 マインドフルネスの理論と実践：プラクティスを通じて学ぶ
3. 学会等名 日本学生相談学会第40回大会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 池埜聡
2. 発表標題 マインドフルネスにおける倫理の必要性
3. 学会等名 日本マインドフルネス学会第8回大会企画シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 内田範子・池埜聡
2. 発表標題 マインドフルネスにもとづく青少年教育の実践的示唆：NPO法人Inward Bound Mindfulness Education (iBme) の挑戦
3. 学会等名 日本マインドフルネス学会第8回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 野村理朗、佐藤千織、中山一輝、田中美吏、池埜聡
2. 発表標題 『無心』の心理学 IV
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会企画シンポジウム
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 池埜 聡・内田 範子
2. 発表標題 リレーショナル・マインドフルネスの実践
3. 学会等名 日本マインドフルネス学会2020年度研修会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 池埜 聡
2. 発表標題 コロナ禍におけるマインドフルネス：ストレス、モラル・インジューリー、そして差別に向き合うために
3. 学会等名 関西学院大学文学部心理科学実践センター・関西心理学会共催公開講座（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 池埜 聡
2. 発表標題 実践家による研究発表を促進するために：省察、そして研究者のコラボレーションまで
3. 学会等名 日本学校ソーシャルワーク学会近畿ブロック第2回研修会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 池埜 聡
2. 発表標題 モラル・インジューリーとマインドフルネス・COVID-19下における医療・福祉従事者の支援 "Schwartz Rounds" を踏まえて
3. 学会等名 日本マインドフルネス学会第7回大会（招待講演）
4. 発表年 2020年～2021年

1. 発表者名 池埜 聡
2. 発表標題 トラウマケアにおけるマインドフルネスの位相
3. 学会等名 第19回日本トラウマティック・ストレス学会全国大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 池埜 聡
2. 発表標題 新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) に伴うソーシャルワーク実習への対応策：北米スクール・オブ・ソーシャルワークの取り組みから見えてくるもの
3. 学会等名 日本ソーシャルワーク学会第37回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 池埜聡
2. 発表標題 学会シンポジウム「日本の身体文化にみるマインドフルネス」指定討論「トラウマ・インフォームドの観点から」
3. 学会等名 日本マインドフルネス学会第6回大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 池埜聡
2. 発表標題 日本のマインドフルネスの"デイ・ライト（仄光）"：アメリカン・マインドフルネスの光と影を踏まえて
3. 学会等名 日本マインドフルネス学会第6回大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 池埜聡
2. 発表標題 臨床ソーシャルワーク研究者がアメリカで見たマインドフルネスの光と影
3. 学会等名 同志社大学ウェルビーイング研究センター主催セミナー（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 スティーブン・マーフィー重松・池埜聡
2. 発表標題 アメリカにおけるマインドフルネス・ブームの光と影
3. 学会等名 2019年国際カンファレンス“Zen2.0”（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 池埜聡・内田範子
2. 発表標題 マインドフルネスの多様性に呼応する指導者養成の課題：UCLA Training in Mindfulness Facilitation (TMF) の経験を踏まえて
3. 学会等名 日本マインドフルネス学会第5回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 池埜聡
2. 発表標題 マインドフルネスの応用：福祉・教育分野を念頭に
3. 学会等名 日本マインドフルネス学会2018年度研修会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 池埜聡
2. 発表標題 教育現場におけるマインドフルネス：女子少年院での実践を通じた援助構造構築に向けた課題
3. 学会等名 日本マインドフルネス学会第4回大会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 池埜聡
2. 発表標題 マインドフルネスによるソーシャルワーカーの価値体系における主観的変容：8週間マインドフルネス・プログラム受講後の質的探索的調査から
3. 学会等名 日本社会福祉学会第65回秋季大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 池埜聡
2. 発表標題 スクールソーシャルワークの新たな射程：エビデンスに基づくトラウマ理解を実践に活かすために
3. 学会等名 日本学校ソーシャルワーク学会第12回全国大会 in 兵庫（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 池埜聡
2. 発表標題 マインドフルネスがもたらすソーシャルワーク援助関係への影響：ソーシャルワーカーの主観的変容を踏まえた探索的研究
3. 学会等名 日本ソーシャルワーク学会第34回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 池埜聡
2. 発表標題 マインドフルネスを通じた社会福祉専門職の主観的変容：準実験デザインに基づく量的・質的分析からの探索的研究
3. 学会等名 日本マインドフルネス学会第3回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 池埜聡
2. 発表標題 "ココロ"から癒すトラウマ・ケアの理論と実際：マインドフルネスと音楽療法の融合を考える
3. 学会等名 第16回日本音楽療法学会（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 池埜聡
2. 発表標題 "カラダ"から癒すトラウマ・ケアの理論と実際：音楽療法との融合の可能性を踏まえて
3. 学会等名 第16回日本音楽療法学会（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 池埜聡
2. 発表標題 少年院でのトラウマ・ケアに資するマインドフルネスの可能性と課題
3. 学会等名 第15回日本トラウマティックストレス学会全国大会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 池埜 聡（分担執筆）、岩本通弥（編著）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 380
3. 書名 『方法としての 語り : 民俗学をこえて』	

1. 著者名 池埜 聡（分担執筆）、大塚 美和子・西野 緑・峯本 耕治（編著）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 276
3. 書名 『「チーム学校」を実現するスクールソーシャルワーク：理論と実践をつなぐメソ・アプローチの展開』	

1. 著者名 池埜聡	4. 発行年 2017年
2. 出版社 中央法規出版	5. 総ページ数 183
3. 書名 福祉職・介護職のためのマインドフルネス：1日5分の瞑想から始めるストレス軽減	

1. 著者名 足立里江・池埜聡	4. 発行年 2017年
2. 出版社 関西学院大学出版会	5. 総ページ数 234
3. 書名 ケアマネジメントにおける「援助関係の軌跡」：クライアントとの間にあるもの	

〔産業財産権〕

〔その他〕

池埜研究室HP (トラウマ・インフォームド・ソーシャルワーク & マインドフルネス)
<https://mindfulnesslabo.com/index.html>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------